



バッハの森通信

第116号
2012年
7月20日発行

財団法人筑波バッハの森文化財団

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail: info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 (財)筑波バッハの森文化財団

面白さを追い求めて生きるための 七分のー

バッハの森は、創立以来27年間、いつも会員の中から数人の方々がヴォランティアになり、会計、会員との連絡、建物の維持、その他の事務を処理し、データの入力をしています。ご存知ない方が多いかもしれませんが、これら献身的なヴォランティアの方々が縁の下の力持ちになって、バッハの森の運営は支えられてきました。

しかし、会計事務のプロは誰もいませんから、いつもどこかの公認会計士事務所にて会計の監査を依頼し、その監査に基づいて報告書を作成、公表してきました。会計士事務所は、この27年間に4回変り、昨年秋からは、T事務所をお願いしています。

* * *

先日、このT事務所から、バッハの森担当のKさんが、書類作成の打ち合わせに来てくださいました。これは彼の3度目の来訪でしたが、仕事が終わって四方山話をしていたとき、突然、思いがけない感想を聞かせてくださいました。「バッハの森にうかがうと、いつもホッとします。皆さんの目が輝いているんですよ。他では、儲かるか、儲からないか、というような話ばかりしているので」

実は、T事務所の前に監査を依頼していた会計士事務所からは、財政基盤が余りにも脆弱だから、その強化策を考えるように、という忠告を受けていました。もちろん、Kさんもバッハの森の財政状況が分かっていますから、「ホッとする」というのはおかしな話なのですが、この感想には続きがあります。

Kさんが会計事務を手伝っている他の団体と比較してみると、バッハの森は、ある大学のアメリカン・フットボール・クラブに似ているそうです。要するにバッハの森は“クラブ活動”をしているのだから、確かに基金のような財政基盤はもっと強化す

る必要があるけれど、その活動が“面白い”と思って集まる会員がいる限り“クラブ活動”は続く、というのです。“クラブ活動”とは、よくぞ言ってくださいましたね、と大笑いしましたが、バッハの森が、会計事務をしに来た人にも、“ホッとする”雰囲気を与えられたことを知らされ、嬉しくなりました。

* * *

これはまさにバッハの森が願っていることだからです。古代ヘブライ人は、1週間7日のうち6日間は食べるために働け。しかし7日目は休んで“楽しむ”と教えました。「安息日」の定めです。これは、人間、働らかなければ食べていけないが、全生活の七分のーは“楽しみ”のためにとっておけ。そうすれば人間らしく生きることができる、という知恵です。この“七分のー”になることを目指して、バッハの森は活動しています。それが、“ホッとする”雰囲気を醸し出しているのでしょう。

ですから、バッハの森の会員も、皆、それぞれの職業、家事、子育て、介護など、“七分の六”を大切にしていますし、お互いにそれを尊重しています。そのうえで、“七分のー”を求めて、バッハの森の活動に参加しているのですが、クワイア（合唱）のような共同作業になると、参加者全員の“七分のー”が重ならないと実行できなくなります。本号の「たより欄」で、「今期も皆さん、お忙しく（出席が不安定だったので）、最後までバランスがよく分からず不安でしたが、本番はさすがでした」と、比留間恵さん（バッハの森クワイアの指揮者）が、遠慮がちに書いていますが、この言葉はバッハの森の状況をよく表しています。

自分の“七分のー”を、各自が自分で決めるのは易しいことではありません。いつの間にか、なくなってしまう恐れがあるからです。しかし、それを義務化したら、“七分のー”の意味がなくなり、“ホッと”できなくなってしまう。このジレンマの唯一の解決策は、“七分のー”の面白さを追い求める楽しさを知ることです。さあバッハの森の面白さを一緒に楽しみませんか。（石田友雄）

キリエ・エレイソン

主よ、憐れみたまえ

“命”を願い求めて

*以下は、去る7月1日にバッハの森コンサートで朗読した「解説」です。

ミサを象徴する式文「キリエ」

ミサは、初代教会から伝わるいろいろな礼拝式文を継承して、7世紀頃に成立した西方教会の典礼です。それぞれの日曜日や祝日ごとに変わる固有文とすべてのミサに共通する通常文と呼ばれる2種類の式文から構成されています。ですから、ミサは通常文の骨組みに固有文で肉付けされた礼拝形式と言えるでしょう。

さて、ミサの骨格をなす通常文は5つの式文から成り立ち、その最初が「キリエ」、最後が「アニユス・デイ」です。ところで、ラテン語のミサ式文中、「キリエ」だけがギリシャ語です。ギリシャ語は、キリスト教が誕生したローマ時代の世界共通語でしたから、初代教会の信徒が著作した新約聖書の原典もギリシャ語です。「キリエ」は、ローマを中心とする西方教会が確立する前に定着していた、ギリシャ語礼拝式文の名残りなのです。それは、旧約聖書の言語であるヘブライ語の「アーメン」や「ハレルヤ」が、後代、各国語の典礼の中にそのまま残された状況と似ています。想像ですが、「キリエ」は、早くからミサを象徴する式文として、「ミサをする」と言う代わりに「キリエをする」と言ったのかもしれない。

「キリエ」の式文は、「キリエ・エレイソン」「クリステ・エレイソン」「キリエ・エレイソン」という3つの文章から成り立っています。「キリエ」は「主よ」、「エレイソン」は「憐れんでください」、「クリステ」は「キリストよ」という意味です。初めの「キリエ」が「父なる神よ」、後の「キリエ」が「聖霊なる神よ」を表して、父・子・聖霊なる三位一体の神に「憐れみ」を乞い求める祈りです。

問題解決者、「神の小羊」

通常文最後の式文、「アニユス・デイ」は、「神の小羊」という意味です。それは、「神の小羊よ、あなたは世の罪を負う方、私たちに憐れんでくだ

さい」、ラテン語で「アニユス・デイ、クィ・トーリス・ペッカータ・ムンディ、ミゼレレ・ノービス」と2回唱えた後、3回目の最後の祈願だけを「私たちに平和を与えてください」、ラテン語で「ドナ・ノービス・パチェム」と変えて終わります。

ミサの終わりでは、初めのように三位一体の神ではなくキリストだけ選び、「アニユス・デイ」、すなわち「神の小羊よ」と呼びかけたのは何故でしょうか。複雑な歴史的、神学的背景を省略してごく簡単に説明すると、まず、「神の小羊」は、初代教会の信徒たちが、十字架で処刑されたイエスの姿を、聖書に描かれた犠牲の小羊と重ね合わせて説明したこと由来します。

「世の罪」とは、生きていくに際して人間が遭遇する、自分では解決できない種々の問題です。そこで、これら解決できない問題を私たち人間に代わって「背負い」、犠牲の小羊のように、すすんで犠牲になって解決して下さる方がイエス・キリストだ、というのです。

ですから、天地を創造した父なる神でも、人間に元気を与える聖霊なる神でもなく、問題を解決して下さるキリストが、罪、すなわち、問題を背負う姿を象徴する「小羊」として、ミサの最後に呼ばれるのです。ミサは、「アニユス・デイ」を唱えた後、典礼のクライマックスである聖餐をして終わります。

命が「当たり前」でなくなるとき

「キリエ・エレイソン」、すなわち、「主よ、憐れんでください」という式文は、マタイによる福音書20章29節以下が伝える2人の盲人のエピソードに由来します。それによると、道端に座っていた2人の盲人が、通りかかったイエスに向かい、人々の制止を振り切って、「主よ、私たちに憐れんでください」と大声で叫びました。彼らの叫び声を聞きつけたイエスが、「何をして欲しいのか」と尋ねると、2人は「目を開けていただきたいのです」と答えました。そこで、イエスが「深く憐れみ」、その目に触れると、彼らの目が見えるようになった、という奇跡物語です。なお、「深く憐れみ」と訳した言葉は、本来、「内臓がねじれるような痛みを覚える」という意味です。

このエピソードは、「キリエ・エレイソン」が、自分では解決できない問題の解決を願う祈りであることをよく伝えていますが、2人の盲人は、盲目という、どうにもならない問題を抱えていました。ですから、「目を開けて欲しい」と願って、イエスに「憐れみ」を乞い求めたのです。では、「キリエ・エレイソン」、「主よ、憐れんでください」

と唱えて始めるミサは、どのような問題の解決を願っているのでしょうか。それは、通常文最後の式文、「アニュス・デイ」の最後の言葉、「私たちに平和を与えてください」に籠められています。

「平和を与えてください」とは、言うまでもなく、「平和に生きることができるように」という願いであり、結局は「生きていけるように」、という願いに他なりません。しかし、単に「生きていくこと」は、神に憐れみを乞い求めなければならないような、自分では解決できない問題なのではないでしょうか。

普段、私たちは、神の憐れみを受けなければ「生きていけない」とは思っています。生きているのが「当たり前」だからです。しかし、愛する人と死別したり、大災害に遭遇したりして、自分が生きていることが「当たり前」ではないことを知ると、命があるということが、実は「特別な」ことだ、と思えてくるのです。そのとき初めて、私たちは、今、生きていられるのは神の憐れみによる、という昔の人の思いが分かってくるのではないのでしょうか。

憐れみにはいられない神

「憐れみ」について、聖書が伝える神の姿は必ずしも一様ではありません。先ず、シナイ山で神から律法を授けられたとき、留守中にトラブルを起こした民衆に腹を立てたモーセが、「あなたの栄光を示してください」と神に訴えると、神は「私は恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ」と答えました（出エジプト記33章19節）。この神の返答から分かることは、同義語の「恵み」とともに、「憐れみ」は神が自由に決定することであって、その決定に対して、人間がとやかく言える立場ではないということです。人間は「憐れんでください」と乞い求めるほか何もできないのです。

ところが、バビロン捕囚時代の預言者エレミヤは、それとは少々違う神の思いを知らされました。それによると、モーセ時代に特別な民族としてイスラエルを選んだ神は、恩知らずにも背いたイスラエルに怒り、一度は滅ぼしてしまおうと決心したが、思い返した。なぜなら「彼は私のかげがない息子。憐れみにはいられないからだ」と、神がエレミヤに語ったということです（31章20節）。状況は違いますが、盲人の訴えを聞いたイエスが、「内臓がねじれるような痛みを覚えた」ことを思い出します。どちらも、人間が苦しんでいるのを見ると、憐れみにはいられなくなる神の思いを伝

えています。このような経験を通して、ヘブライの詩人は、「神の憐れみは全地に満ちたり」（詩篇33篇5節）、或いは、「主に感謝せよ。主は善い方。その憐れみは永遠（トシ）なれば」と歌いました（詩篇106篇1節）。

憐れみ深い神を信頼して

本日のコンサートは、前半で、三位一体の神に呼びかける「キリエ」を、中世のラテン語挿入詩「善きものの泉よ」に基づくコラールとバッハによるそのオルガン編曲のアンティフォンによって演奏しました。これは、バッハの教会の礼拝で行われていた普通の形式です。しかし、これから演奏する「キリエー キリストよ、汝、神の小羊よ」（BWV 233a）は、他に例を見ない特別な曲です。この曲でソプラノⅠは、「キリエ」の4声合唱に重ねてドイツ語訳の「アニュス・デイ」を歌います。このように、ミサ通常文の最初の式文と最後の式文が同時に歌われるので、普通は、ミサの終わりになって、初めて、憐れみを乞い求める目的が「平和を与えてください」という願いであることが示されるのに対して、この曲では、その目的が、曲の終わりに歌われてしまいます。そのため、「平和を与えてください」という願いがより鮮烈に響き、祈願に応える憐れみ深い神を信頼する熱い思いが同時に聞こえてくる、不思議な音楽になっているのです。

この曲は、バッハがヴァイマルの宮廷楽長だったときに作曲し、後にトマス教会のカントールになってから追加した「グローリア」とともに、ルター派ミサの「キリエ」としても伝えられていますが、そのときドイツ語「アニュス・デイ」の箇所が、歌詞から、ホルンとオーボエによる器楽のユニゾン演奏に置き換えられました。ミサの「キリエ」として用いる場合は、ミサ通常文の最後の式文である「アニュス・デイ」を、ミサの最初の通常文と同時に歌うわけにはいかなかったのでしょう。

ですから、これから私たちが演奏する「キリエー キリストよ、汝、神の小羊よ」が、本来、どのような用途のために作曲されたのかは謎です。いずれにしても、私には、この曲から、「平和に生きる」こと、より端的には「命」を願い求めて、あの2人の盲人のように、ひたむきに「主の憐れみ」を乞い願う叫びが、全地に満ち溢れる主の憐れみの讃美とともに聞こえて来るような気がします。皆様は、どのような思いが籠められた音楽としてお聴きになるのでしょうか。（石田友雄）

伊太利亜おるがん放浪記

オリジナルの響きを日本の皆様に
紹介する夢を追い求めて

*以下は、宮本とも子さんの貴重なイタリア・オルガンが、バッハの森に到着するまでの経緯を記した報告です。

タリアヴィーニ先生との出会い

故石田一子先生のご友人でもある、林佑子先生は、1970年代初めから米国ボストンのオールド・ウェスト教会のオルガニストをされています。フィスク・オルガンの創始者であるチャールズ・フィスク氏が魂を籠めて建造したオルガンが設置されているこの教会に、佑子先生はヨーロッパ各地から多くの優れたオルガニストを招待され、沢山のコンサートを開催してくださいました。お陰で、1972年から4年間、この地に学ばせていただいている間に、私は多くのオルガニストの方々と出会い、その演奏を聴く機会に恵まれました。その中で特に印象に残ったのが、イタリアの巨匠、F. タリアヴィーニ先生の明るくてエレガントな演奏でした。

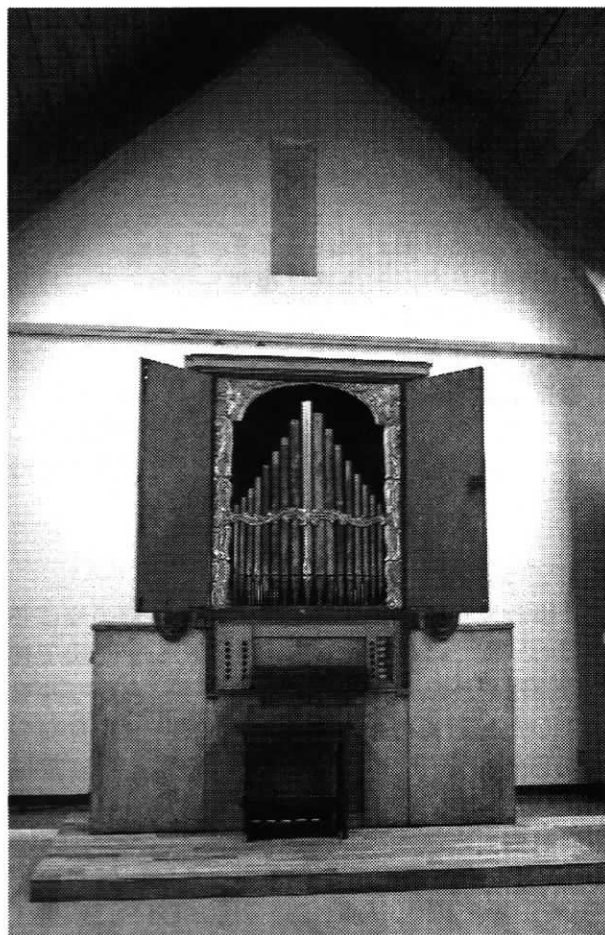
その後、米国、日本（ICU主催のオルガン講習会）、オーストリアのインズブルック、そしてイタリアのピストイアで、タリアヴィーニ先生の御指導を仰ぎ、イタリアで生まれたオルガン曲を学んで参りましたが、イタリア・オルガンの声楽的なプリンシパルの音色が忘れられず、いつかイタリア・オルガンのオリジナルを日本の皆様に紹介できないものか、と願ひ続けて参りました。

ピストイアの古道具屋の店先から日本へ

タリアヴィーニ先生の演奏を最初に聴いてから20年以上経った1995年夏のある日、ポローニャ音楽院教授のピネスキー司祭に、国際電話で私の夢が実現できないか相談しました。すると、思いがけないお返事をいただきました。「みじめな姿で捨てられていたオルガンを、古道具屋の店先で見つけ、気になったので購入して修復させたものが手許にある。このオルガンなら、文化財に登録されていないから、国外に移設することが可能だろう」というのです。丁度、9月に、クラヴィコードの国際シンポジウムに出席して演奏するためイタリアに行く予定があったので、急遽ピストイア

に立ち寄って、そのオルガンとお見合いをすることにしました。そのオルガンとの出会いは予想以上のものでした。数時間弾かせて頂いたのち、是非このオルガンを譲っていただきたいとお願いしました。

それから約1年後、購入のための資金調達や輸入方法、その他の調整を経て、長い船旅の後に到



イタリア・オルガン仕様

18世紀様式オリジナル イタリア・オルガン

18世紀にイタリアのトスカーナ地方で製作された
制作者不詳

Principale 8'	プリンチパレ 8'
Ottava 4'	オッタヴァ 4'
Decimaquinta 2'	デチマクインタ 2'
Decimanona 1 1/3'	デチマノナ 1 1/3'
Vigesimaseconda 1'	ヴィジェズィマセコンダ 1'
Vigesimasesta 2/3'	ヴィジェズィマセスタ 2/3'
1段手鍵盤 C - d 3 (47鍵)	
バス：ショートオクターヴ	
プルダウンペダル C - B (8鍵)	

着したイタリア・オルガンを、個人所有のまま、私が勤務しておりますフェリス女学院大学緑園キャンパスのチャペルに置かせていただく許可を得ました。それは1年ごとに契約更新をする約束で、楽器を大学に無料で貸与し、その代わり無料でチャペルに置かせていただくという契約でした。到着したオルガンの組み立てのために、ギラルディ夫妻をイタリアから招き、1週間滞在していただきました。そして、1996年10月1日に、ピストイア市副市長、元オーナーのピネスキー教授、フェリス女学院大学学長・佐竹明教授、フェリス女学院の関係者一同の参列のもとに、日本におけるこのオルガンの新しい使命を祝福する奉獻式を執行していただきました。

1996年にフェリス女学院大学緑園キャンパスに置かれてから14年間、このオルガンは、何のトラブルもなく、学生たちの授業に使われてきましたが、チャペルにはもう1台大学のオルガンが置いてあるため、イタリア・オルガンの使用時間が制限されていました。また、このオルガンの本来の目的だったカトリックのミサ典礼に用いて頂く場所はないのかと、移設する可能性を捜し求めるようになりました。

フェリスから築地へ

その頃、カトリック築地教会のオルガニストと出会いました。この教会では、古いフランス製のハルモニウム・オルガンが大切に守られていました。そこで、教会の委員会に諮っていただいたところ、半年間の協議を経て、受け入れが快諾され、2010年春にカトリック築地教会に移設されることになりました。希望通り、日曜日にはミサに用いていただき、クリスマスにはこのオルガンのために委嘱した新曲も作曲され、順風満帆の歩みのように見えました。

ところが、翌年になって、3月11日の震災は無事に過ごすことができましたが、司祭の交代にともない、オルガンを移動させることが余儀なくされてしまいました。それまでに、このイタリア・オルガンは、築地風琴会に仲間入りして、近隣の教会や寺院と共同して活躍していました。そこで、このオルガンの響きを高く評価してくださっていた月島聖公会の司祭が、新築された聖堂にこのオルガンを招き入れることを委員会に諮り、受け入れを決定してくださいました。この教会の奏楽者たちは、このオルガンをとても大切に取り扱い、喜んで礼拝の奉仕に使用してくださいました。また、立教大学のオルガニストギルドの方々や、はるばる神戸の大学からも見学に来られる方もいて、素晴らしい交流の時を過

ごすことができました。

しかし、新しい礼拝堂の建物とこの古いオルガンが、どうも視覚的に折り合わないことに、皆さんが気付いてきました。そのうえ、なんと、100匹以上のキクイムシを祭壇上に産みつけてしまったのです。全く予想外のことで、本当に驚きました。即刻、消毒会社に依頼し、すべてを分解、消毒することとしました。2011年の秋から冬にかけて、このイタリア・オルガンは3日間に亘って徹底的に消毒されました。

バッハの森に安住の地を求めて

カトリック築地教会から移動を余儀なくされたときから、いざとなったらバッハの森で受け入れることができる、という石田友雄先生のご好意により、2011年の暮れに、このオルガンは、バッハの森のセミナーホールに安住の地を見つけることができました。正月には新たに耐震工事を施し、消毒の再確認を行ったイタリア・オルガンは、バッハの森にある沢山の楽器たちに仲間入りさせていただきました。オルガンのサイズも雰囲気も、セミナーホールにぴったり合っているので、まるで注文して建造したみたいだと言われています。

このオルガンは、製作者不詳ながら、ピストイア市で最初に修復されたときに、トスカーナ地方で製作された18世紀のオルガンであることが確認されました。送風用のモーターが新しく付け加えられましたが、もともとの「紐を引いて風を送る」装置もオリジナルのまま機能しています。

放浪の末辿り着いた「伊太利亜おるがん」が、バッハの森に集う素晴らしい仲間の方々とお子様たち、そして近隣の皆様、若い世代の方々に親しまれ、愛されることを心から希望しております。

(宮本とも子)



風を送るため紐を引いてふいごを膨らませた状態

竜巻の被害に遭いませんでしたか？

2012年5月8日

友雄さん

この数週間、私たちは皆さんのことをよく話し合っていました。この季節によくバッハの森にうかがったからです。今、ドイツのマスコミは、つくばが大変な竜巻被害にあったことを伝えていきます。皆さんが大丈夫だったかどうか、とても心配しています。この一年間に、皆さんの住んでいる地方が、大変な自然災害に遭ったことをとても心配しています。

勿論、友雄さんがお元気に活動を続けていらっしゃるかどうかも、心配しています。健康ですか。良い仲間がいますか。

一筆、お便りします。皆さんにくれぐれも宜しくお伝えください。皆さんの友人、

ヤン・エルンスト (シュヴェリン大聖堂カントル)
マインデルト・ツヴァルト (声楽家)

* * *

オランダよりご挨拶

2012年7月6日

石田友雄先生

大変ご無沙汰しております。

もう大分前のことになりましたが、2005年にバッハの森で開催されたワークショップに参加させていただき、友雄先生、一子先生をはじめ、バッハの森の会員の皆様にご世話になりました。フェリス女学院大学で宮本とも子先生のご指導のもと、オルガンという楽器を学び始めてからは9年。時が経つのは本当に早いものです。フェリス卒業後、ドイツで2年、その後アムステルダムで3年研鑽をつみ、お陰様で先月無事に修士卒業演奏会を終えることができました。留学している間も、バッハの森で学んだことや書き込んだメモはとても役に立ち、再度読み返してはつくばでの日々を懐かしく思い出しておりました。

昨年の大震災のときは、ホームページで、バッハの森でもオルガンが大破するなど甚大な被害を受けたことを知りました。その後、多くの方々の支援によって、楽器は見事に修復され、またクラヴィコードなどの新しい楽器もバッハの森に仲間入りしたことをうかがい、胸が熱くなりました。私の出身、秋田県は、震災で大きな被害は受けませんが、隣県の大変な被害状況を知ると、

復興のために私も何かしたいという気持ちは強くなるばかりです。

先生方に再びお目にかかれることを心から願っております。皆様どうぞよろしくお伝えください。

高野温子 (オルガニスト)

* * *

面白さが増すばかりですね

2012年7月6日

バッハの森クワイアの皆様

先日のコンサート、お疲れさまでした。

今期も皆さん、お忙しく (出席が不安定だったので)、最後までバランスがよく分からず不安でしたが、本番はさすがでした。有り難うございました。

来期はJ. S. Bach, "Meine Seel erhebt den Herren" (BWV 10) を練習します。年々、バッハの音楽の奥深さを知り、面白さは増すばかりです。バッハ同様、聖書も面白いですね。こんな面白いものに出会えたという喜びを、しみじみ感じております。またご一緒に考えながら音を造り上げていけたらと思っております。

では、7月末のワークショップでまたお会いいたしましょう！ このワークショップに参加できない方とは、9月の来期初めのワークショップでお会いできることを楽しみにしております。お元気で。

比留間恵 (バッハの森クワイア指揮者)

寄付者芳名 (敬称略日付順) (2012.4.1 - 5.19)

下記の方々から計42,454円のご寄付をいただきました。

比留間恵、松村治美、石田友雄

建物維持積立寄付 (敬称略日付順) (2012.3.30 - 6.18)

下記の方から、計221,000円のご寄付をいただきました。

畠中和華、宮本耕一・とも子、渡辺恵子、斉藤妙子、白川知預子、中西美江子、慶野多美子、西館弓子、橋本周久・秀子、本多谷雄・和子、横田穠一・博子、岩澤靖子、内藤節子、秋葉啓子、熊谷徹、大江友子、手塚幸子、賀来達三、中原敏昭、三宅利子、村上晴美、鳥飼真紀子、吉原美智子、丸山妙子、青柳廣則、本多美雄

2011年度・統計

集会回数・参加者延べ人数
(2011. 4. 1～2012. 3. 31)

学習コース	回数	延人数	
クワイア (混声合唱)	31	410	
ハンドベル・クワイア	29	155	
入門講座：聖書を読む	30	183	
レチタティーヴォを歌う	9	42	
オルガン音楽研究会	13	96	
オルガン・クラブ	2	6	
オルガン・クラス	3	13	
コラール研究会	15	94	
クラヴィア研究会	14	68	
クリスマス祝会	1	21	
小計	147	1088	
公開プログラム			
コラール・カンタータ研究	14	174	
コラールとカンタータ	16	195	
コンサート	3	130	
ワークショップ	1(2日)	29	
バッハの森・フェリス・ オルガン科合宿	1(3日)	41	
クラヴィコード特別講習会	1	6	
小計	36	575	
運営活動			
運営委員会	38	146	
理事会・評議員会	4	42	
大掃除	1	10	
準備会	2	15	
オルガン修復作業	1(6日)	18	
オルガン調整	1	1	
イタリア・オルガン設置	2(4日)	8	
打ち合わせ	3	15	
実務実態調査	1	2	
小計	53	257	
その他			
結婚祝賀会	1	78	
見学	1	3	
来訪	4	8	
小計	6	89	
総計	242回	2009人	
入退会者数 (2011年度)			
	入会	退会	増減
維持会員	13	15	-2
賛助会員	2	9	-7
計	15	24	-9

会員数 (2012. 3. 31現在)	
維持会員	88人
賛助会員	49人
計	137人

会計報告 (2011年度) 単位：千円

全体 (指定寄付金を除く)

収入の部	
前期繰越	891
財産利息	3
維持・賛助会費	1,054
寄付	969
事業収入	3,338
雑収入	1,006
計	7,261
支出の部	
事業費	3,948
管理費	2,689
次期繰越	624
計	7,261

* * *
指定寄付金 (建物維持) 増減

収入の部	
前期繰越	1,699
寄付	3,518
利息	1
計	5,218
支出の部	
建物補修	3,489
前年度繰り入れ	78
次期繰越	1,651
計	5,218

* * *
指定寄付金 (地上権更新) 増減

収入の部	
前期繰越	916
寄付	12
利息	2
計	930
支出の部	
次期繰越	930
計	930

2012. 3. 31現在	
長期借入金	34,000
短期借入金 (建物維持)	5,330
短期借入金 (その他)	500

- 4.12, 19, 26 運営委員会 各参加者4名。
 4.13 開講 初夏のシーズン
 4.14 最初の評議員選定委員会 参加者6名。
 4.23 訪問 鈴木欽一氏・(財)茨城県教育財団理事長
 5. 4 打ち合わせ 夏の教会音楽ワークショップの準備。ルーシーズより3名、バッハの森より3名、計6名。
 5. 9 訪問 ヘブライ大学名誉教授・イスラエル・エフアル夫妻とモルデハイ・コーガン氏。アマタイ・バルヒーウナ氏、山田重朗(筑波大学教授)夫妻。
 5.10,17,24,31 運営委員会 各参加者4名。
 5.25 訪問 井上直樹氏(NHK社会部記者)
 6. 2, 9,23; 7.7 打ち合わせ 夏休みの音楽会 各参加者6名。
 6. 7,14,21 運営委員会 各参加者4名。
 6.20 オルガン調整 大庭美歌氏。
 6.28 運営委員会 参加者5名。
 6.30 オルガン調整 河内克彦氏。
 7. 1 バッハの森コンサート 参加者47名。
 7. 5 運営委員会 参加者4名。
 7. 7 理事会・評議員会 財団法人筑波バッハの森文化財団 出席者8名。

**J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ
 コラール・カンタータ研究
 コラールとカンタータ (JSB)**

- 4.14 復活祭第2祝日のためのカンタータ「私たちの許に留まってください」(BWV 6) ; コラール「ああ主よ、われらと」、「み言葉の許に」。オルガン: J.S. バッハ「あなたのみ力を示してください、主イエス・キリストよ」(BWV 6/6)、金谷尚美。参加者15名。
 4.21 第338回、オルガン: J.S. バッハ「ああ私たちの許に留まってください、主イエス・キリストよ」(BWV 649)、金谷尚美。参加者14名。
 4.28 ミゼリコルディアス・ドミニのためのカンタータ「主は私の誠実な羊飼い」(BWV 112) ; コラール「主はわが飼い主」。オルガン: J. S. バッハ「善いものと憐れみが」(BWV 112/5)、平賀邦子。参加者14名。
 5.12 第339回、オルガン: J. P. スウェーリンク「いと高くいますみ神にのみ栄光あれ」、笠間きよ子。参加者16名。
 5.19 昇天祭のためのカンタータ「キリストの昇天のみを」(BWV 128) ; コラール「天に昇りたる」、「おおイエス、我の喜びの主よ」。オルガン: J. S. バッハ「そのときあなたは私を」(BWV 128/5)、海東俊恵。参加者15名。
 5.26 第340回、オルガン: G. P. テレマン「いと高くいますみ神にのみ栄光あれ」、當眞容子。参加者17名。

6. 2 聖霊降臨祭第1祝日のためのカンタータ「私を愛す者、彼は私の言葉を守るであろう」II (BWV 74) ; コラール「父よ、主の聖霊、とく送りたいまえ」。オルガン: J. S. バッハ「ここ地上には誰もいません」(BWV 74/8)、安西文子。参加者9名。
 6. 9 第341回、オルガン: D. ブクステフーデ「私のもとに來い、と神の子が語られる」(BuxWV 201)、安西文子。参加者15名。
 6.16 三位一体後第2主日のためのカンタータ「もろもろの天は神の栄光を語り」(BWV 76) ; コラール「われらにみ恵み、祝福、賜い」。オルガン: J. S. バッハ「神よ、感謝し、あなたを誉め称えますように」、當眞容子。参加者12名。
 6.23 第342回、オルガン: J. G. ヴァルター「神が私たちに恵み深く」、當眞容子。参加者14名。

学習コース

- バッハの森・クワイア(混声合唱) 4.14/13名、4.21/13名、4.28/11名、5.12/14名、5.19/12名、5.26/12名、6.2/10名、6.9/14名、6.16/13名、6.23/13名、6.30/18名。
 バッハの森・ハンドベル・クワイア 4.14/5名、4.21/6名、4.28/5名、5.12/6名、5.19/5名、5.26/6名、6.2/6名、6.9/6名、6.16/5名、6.23/7名。
 コラール研究会 4.13/9名、4.27/8名、5.18/8名、6.1/5名、6.15/6名。
 オルガン音楽研究会 4.13/8名、4.27/8名、5.18/8名、6.8/7名、6.15/7名。
 クラヴィコード・オルガン教室 4.13/6名、4.27/4名、5.18/6名、6.8/4名、6.15/4名。
 入門講座: 聖書を読む 4.14/7名、4.21/7名、4.28/3名、5.12/7名、5.19/7名、5.26/3名、6.2/4名、6.9/8名、6.16/3名、6.23/4名。
 オルガン、クラヴィコード練習 4.3/1名、4.4/1名、4.5/2名、4.10/2名、4.11/2名、4.12/4名、4.13/1名、4.14/1名、4.16/1名、4.17/2名、4.19/4名、4.20/3名、4.21/1名、4.24/4名、4.25/3名、4.26/3名、4.27/1名、4.28/1名、5.8/2名、5.9/2名、5.10/3名、5.11/3名、5.12/1名、5.15/2名、5.16/2名、5.17/4名、5.18/1名、5.19/1名、5.22/4名、5.23/2名、5.24/2名、5.25/2名、5.26/1名、5.29/3名、5.30/2名、5.31/3名、6.1/1名、6.2/1名、6.5/3名、6.6/2名、6.7/3名、6.8/2名、6.9/1名、6.12/2名、6.13/3名、6.14/1名、6.15/1名、6.16/1名、6.19/1名、6.20/1名、6.21/2名、6.22/1名、6.23/1名、6.26/1名、6.27/2名、6.28/2名、6.29/1名、6.30/1名、7.3/2名、7.4/1名、7.5/1名、7.6/2名。